

# 豊島区地域保健福祉計画改定のための 区民意識・意向調査 報告書 《抜粋版》

平成29年3月16日

## 調査の概要

本調査は、高齢者や障害者を含む誰もが住み慣れた地域で暮らし続けることができるしくみの一層の充実を図るため、保健・医療・福祉の各分野にわたり、総合的・体系的に施策・事業を盛り込んだ「豊島区地域保健福祉計画」の改定に反映させるための基礎資料として活用することを目的に実施しました。

- 調査対象 豊島区内在住の満20歳以上の区民
- 標本数 3,000名
- 回収数 922人(回収率30.7%)
- 調査方法 郵送によるアンケート調査
- 調査期間 平成28年10月12日(水)～10月28日(金)

## 【目次】

- 暮らし・健康の状況 . . . . . 2
- 住民同士の支え合いや助け合い . . . . . 6
- 地域での活動 . . . . . 9
- 福祉のまちづくり . . . . . 12
- 福祉・健康についての情報提供や相談 . . . . . 15

## ■くらし・健康状況

### 結果の概要

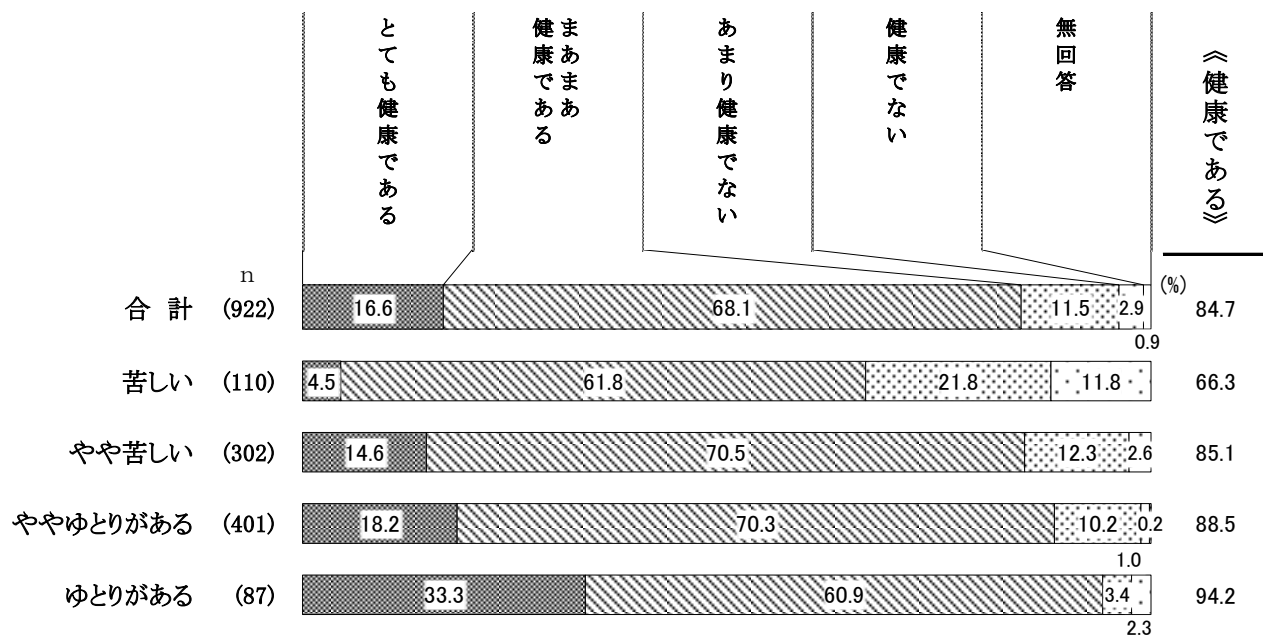
健康状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「主観的健康感（問1）」について、《健康である》と感じている人は、年代別では30歳代、家族構成別では三世帯世帯でそれぞれ最も多くなっています。</li> <li>・「運動習慣（問2）」について、7割以上の方が何か運動や体操など体を動かしており、体を動かしたほうが良いと思っている層も加えるとほぼ全員の方が運動意識を持っています。「運動や体操をしている」との回答は、年代別では50歳代以上、家族構成別では夫婦のみ（いずれかが65歳以上）で最も多くなっています。</li> <li>・「運動や体操の頻度（問2-1）」について、運動や体操をしている方の約9割が、週1回以上の頻度で体を動かしています。</li> </ul>
くらし	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「育児や介護の状況（問3）」について、「育児のみをしている」との回答は、年代別では30歳代（40.0%）で最も多く、「介護のみをしている」は50歳代（20.5%）で最も多くなっています。「育児と介護の両方をしている」という、いわゆるダブルケアの回答は、最多が40歳代で3.5%となっています。</li> <li>・「仕事の状況（問4）」について、「仕事をしていたが、退職した」との回答は、男性の場合、70歳以上（9.8%）、女性の場合、30歳代（14.3%）でそれぞれ最も多くなっています。</li> <li>・「くらしの状況（問5）」について、年代別では40歳代、世帯年収別では400万未満、家族構成別では単身（ひとり暮らし）でそれぞれ、《苦しい》が《ゆとりあり》を上回る結果となっています。</li> <li>・「くらしの負担内容（問6）」について、50歳代までは「収入が少ない」が最も多く、また、「自分や家族の健康状態」は40歳代以上で多くなっています。また、30歳代では「育児」、50歳代では「介護」をあげる人も他の年代に比べて多くなっています。</li> </ul>

### 調査結果から見受けられる課題について

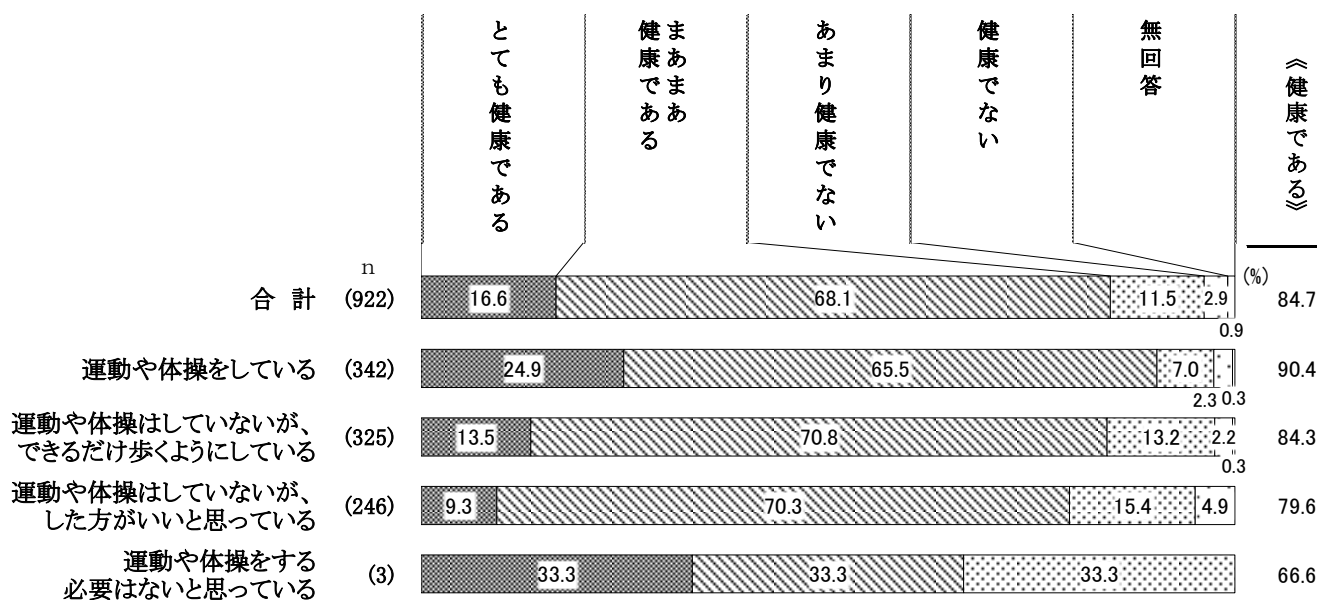
運動習慣と主観的健康感	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主観的健康感は、運動状況別で見ると、運動や体操をしている人のほうが高くなっています。健康寿命の延命に向けても、運動習慣化の重要性がうかがえます。</li> <li>・一方、主観的健康感に関わらず、ほとんどの方は運動や体操はした方がよいと回答しており、運動意識の高さがうかがえることから、運動習慣のきっかけづくりの重要性がうかがえます。</li> </ul>
くらしと主観的健康観	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主観的健康感、くらしの状況別で見ると、《苦しい》と感じている人のほうが低くなっています。</li> <li>・くらしの負担の大きいものとしては、年代別では年代が低くなるほど、「収入が少ない」との回答が増えており、一方で年代が高くなるほど、「自分や家族の健康状態」との回答が増えています。自身や家族の健康が日々のくらしにつながっていくことから、日常からの健康づくりの重要性がうかがえます。</li> </ul>

【主な図表】主観的健康観（問1）

【くらしの状況別（問5）】

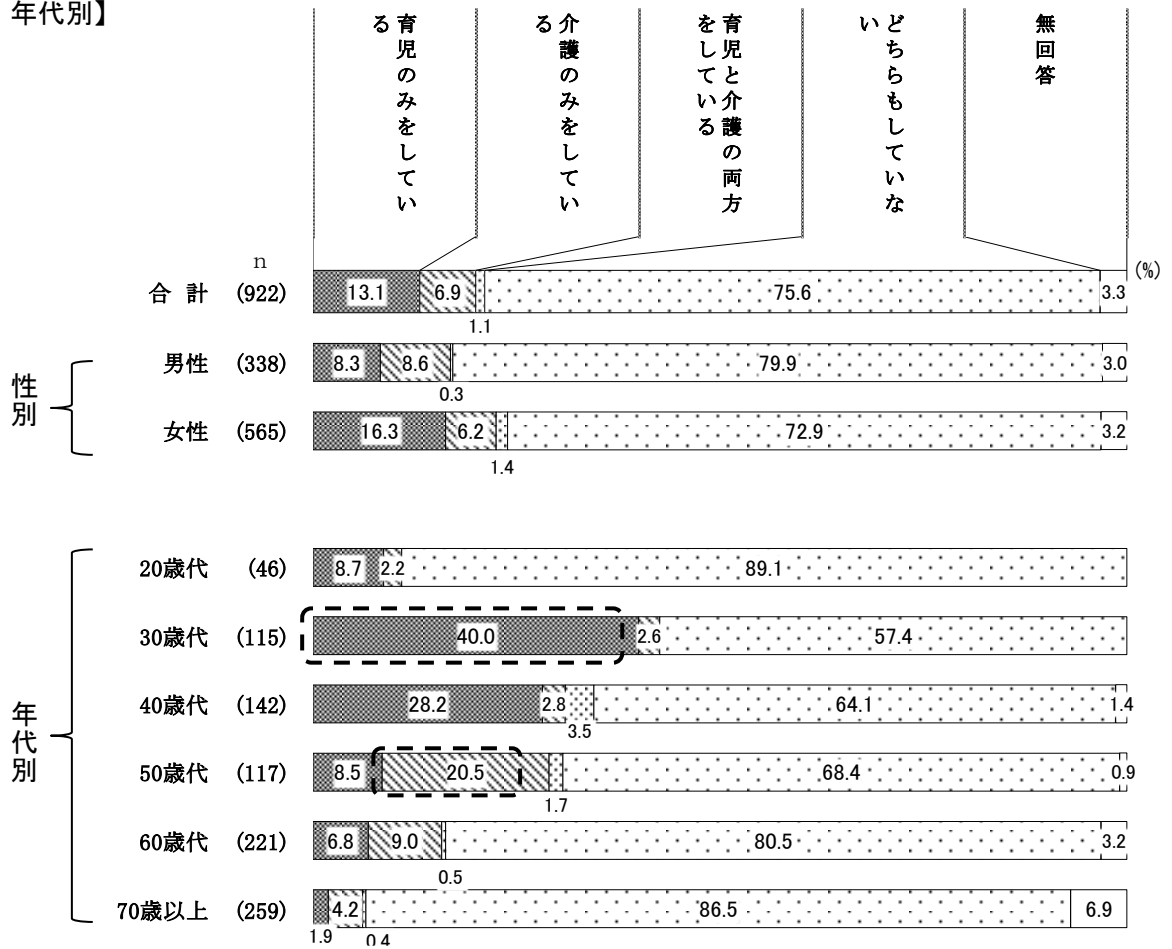


【運動状況別（問2）】



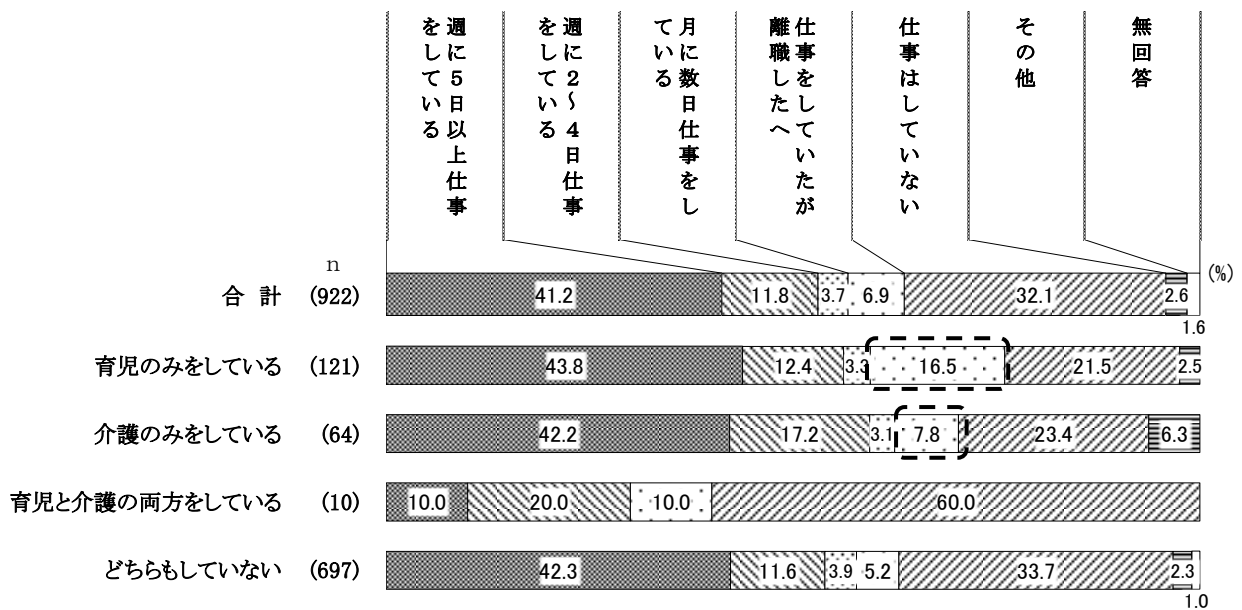
## 【主な図表】育児や介護の状況（問3）

【性別・年代別】



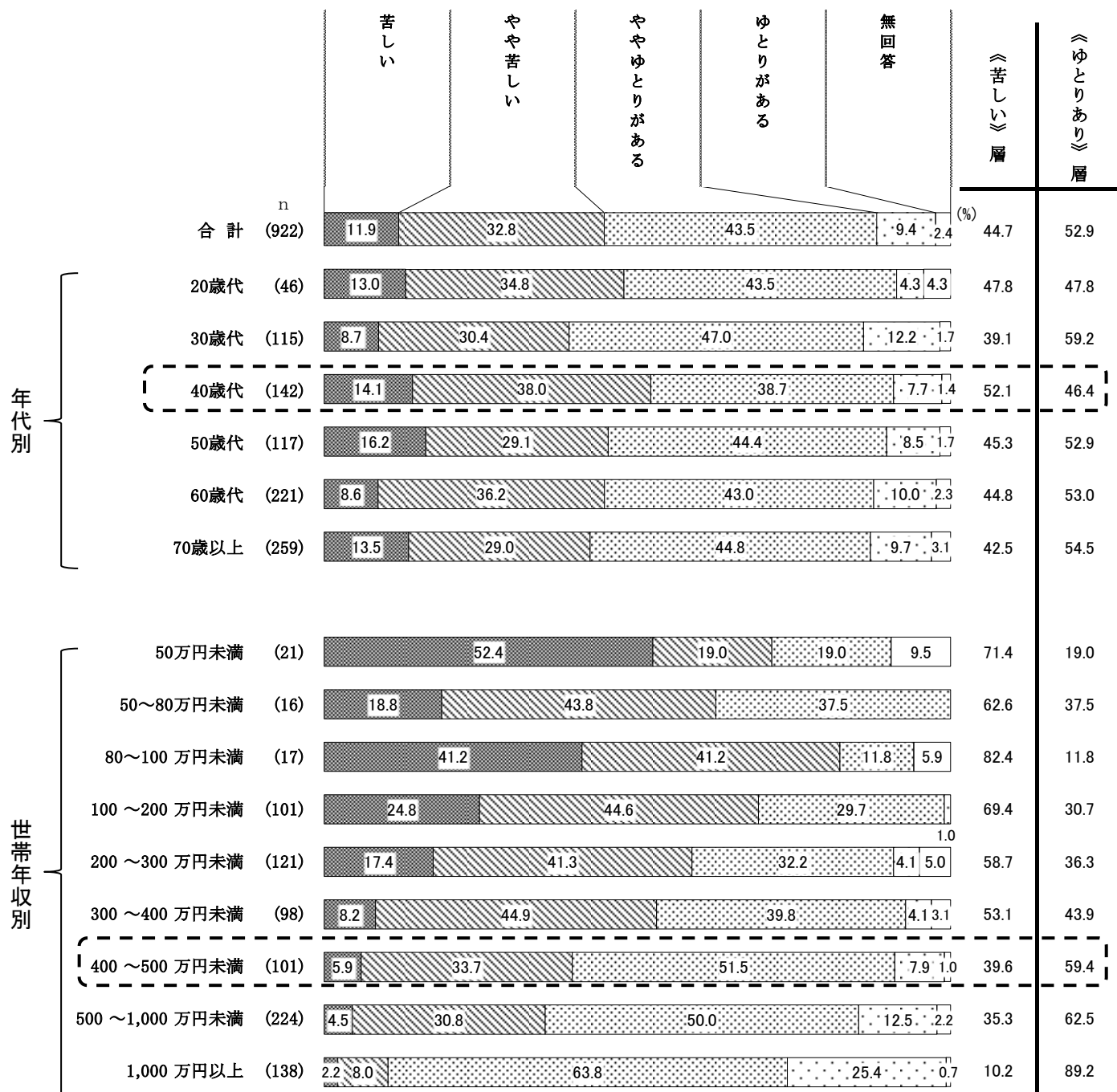
## 【主な図表】仕事の状況（問4）

【育児や介護の取組状況別（問3）】



【関連する主な図表】 暮らしの状況（問5）

【年代別・世帯年収別】



## ■住民同士の支え合いや助け合い

### 結果の概要

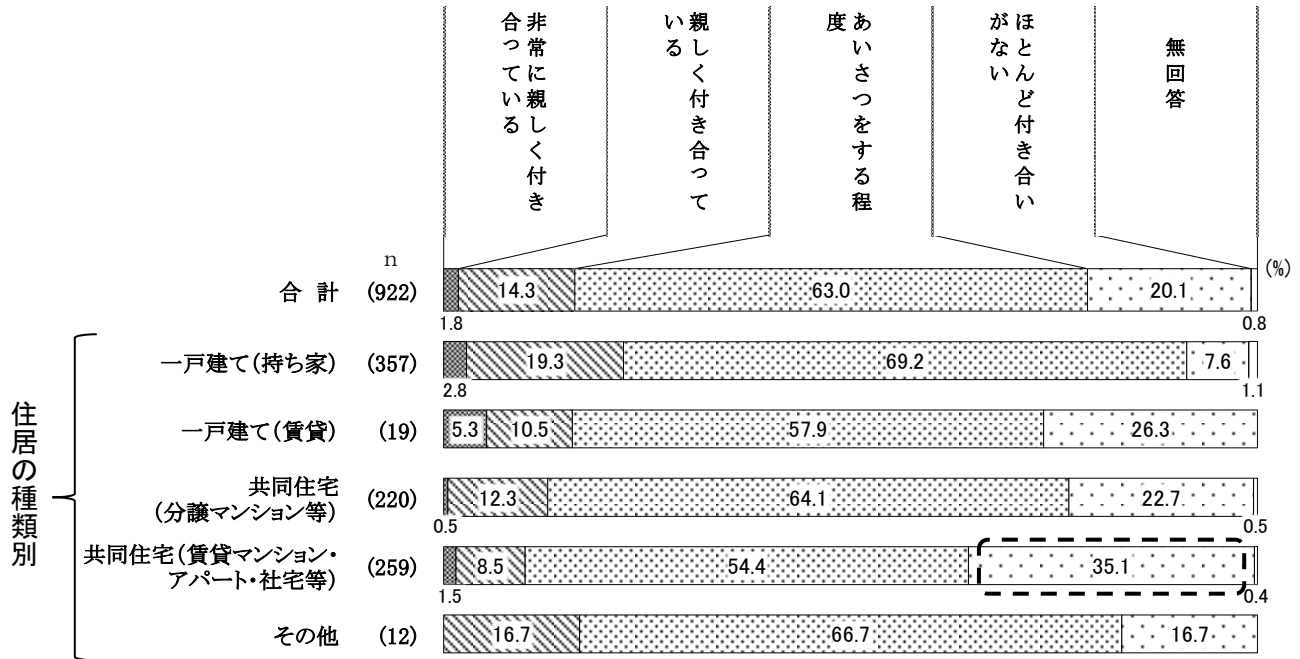
<p>地域や人とのつながりの状況</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「近所づきあいの程度（問7）」について、6割強の人が「あいさつをする程度」と回答しており、前回調査と大きな差はみられません。「ほとんど付き合いがない」との回答は、年代別では20歳代（56.5%）、家族構成別では単身（ひとり暮らし）（36.2%）、居住種別では共同住宅（賃貸マンション・アパート・社宅等）（35.1%）で多くなっています。単身（ひとり暮らし）の中を年齢別にみると、20歳代（73.7%）、30～50歳代（62.2%）で多い状況です。</li> <li>・「親しく付き合っている人数（問8）」について、「いない」との回答は、家族構成別では夫婦のみ（夫婦とも65歳未満）（38.2%）が最も多く、次いで単身（ひとり暮らし）（25.3%）と続いています。</li> <li>・「身近な相談先の人数（問9）」について、「いない」との回答は、家族構成別では単身（ひとり暮らし）（25.8%）と夫婦のみ（ともに65歳未満）（27.6%）で多くなっています。</li> </ul>
<p>支え合いや助け合いの状況</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「住民同士の支え合いや助け合いの必要性（問10）」について、約8割の人が《必要だと思う》と回答しています。住居の種類別では「共同住宅（分譲マンション等）」、近所付き合いの程度別では「親しく付き合っている人」でそれぞれ最も多くなっています。前々回、前回の調査結果と傾向に大きな差はみられません。</li> <li>・「必要な取り組み（問10-1）」について、年代別では、50歳代以下では「地域の人が気軽に集まれる場所をつくりこと」、60歳以上では「町会や自治会が中心となって住民相互の交流活動を進めること」がそれぞれ最も多くなっています。前々回・前回調査と比べると、「町会や自治会が中心となって住民相互の交流活動を進めること」との回答が減る一方で、「行政において、地域活動をする上での相談体制や地域活動への支援を充実させていく」との回答が増えています。</li> <li>・「近所の高齢者等の家庭に対して手助けしていること（問11）」について、4割弱の方が「あいさつや声かけ」と回答しており、年代が高くなるほど、その割合も高くなっています。</li> </ul>

### 調査結果から見受けられる課題について

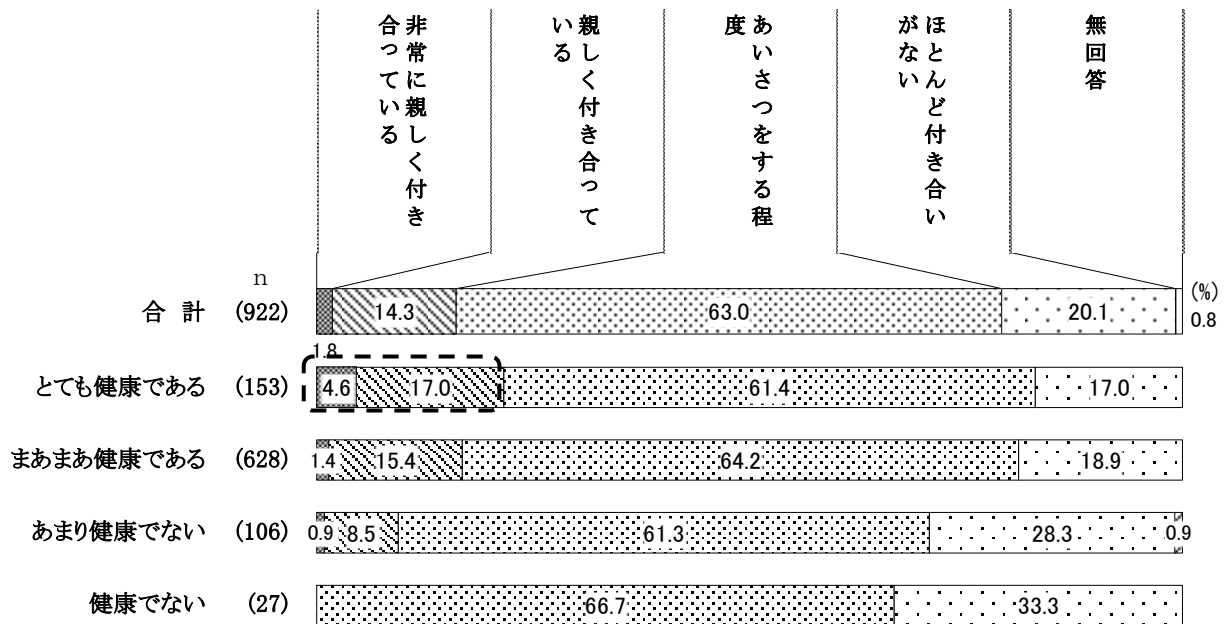
<p>地域とのつながりの要素</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・住民同士の支え合いや助け合いの必要性はどの年代とも感じており、気軽に集まれる場、住民相互の交流活動といった、人とのゆるいつながりの重要性がうかがえます。</li> </ul>
<p>住まいや近所付き合いと支え合い・助け合い</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・共同住宅（分譲マンション等）において、支え合い・助け合いで《必要だと思う》割合が高くなっており、集合住宅における支え合い・助け合いの必要性がうかがえます。また、近所付き合いの程度が深くなるほど、近隣での手助けをしている割合も高くなっており、「あいさつや声かけ」といったちょっとしたきっかけづくりの重要性がうかがえます。</li> </ul>

## 【主な図表】近所付き合いの程度（問7）

### 【住居の種類別】

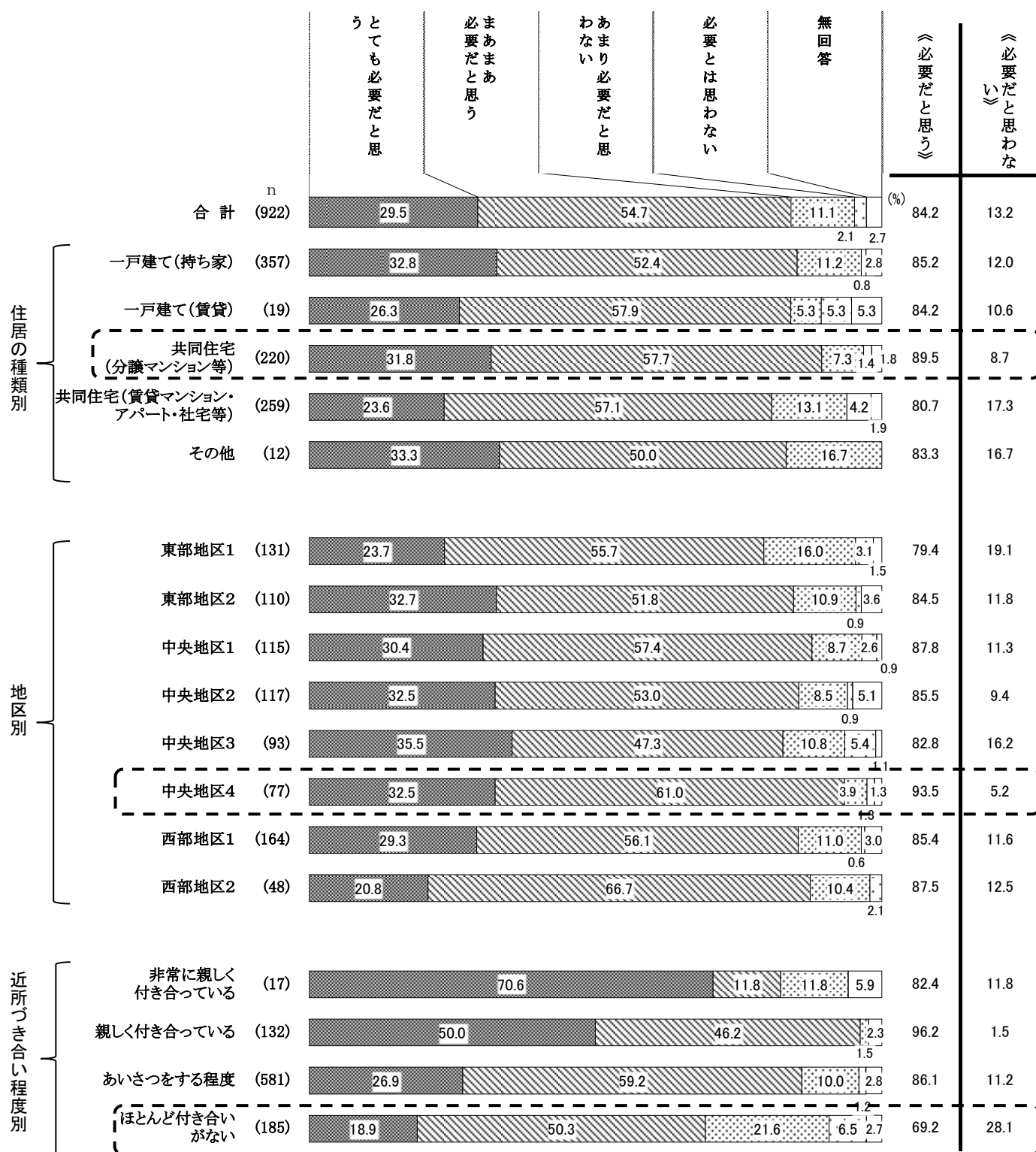


### 【主観的健康感別（問1）】



【主な図表】住民同士の支え合いや助け合いの必要性（問10）

【住居の種類別・地区別・近所づき合い程度別】





## ■ 地域での活動

### 結果の概要

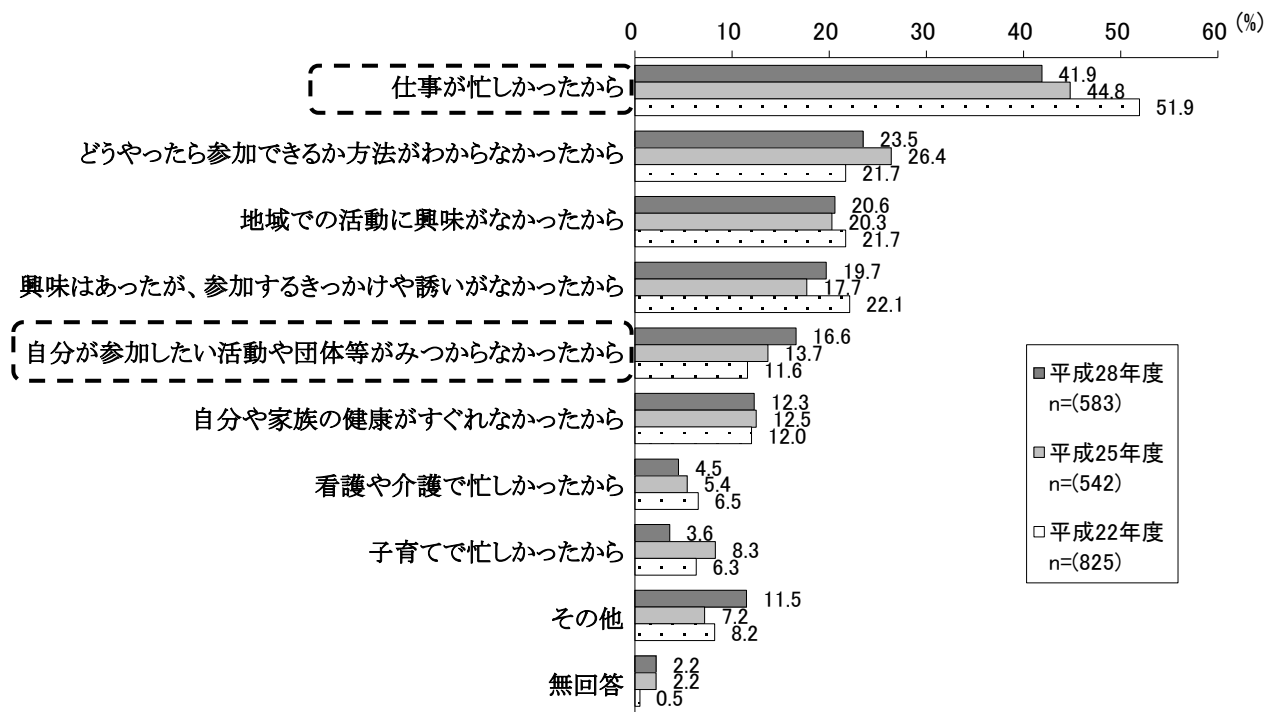
<p>地域活動やボランティア活動の現状</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「地域活動やボランティア活動状況（問12）」について、6割強の方が「いずれにも参加していない」と回答しています。前回調査と比べて、大きな差はみられません。年代が高くなるほど、「いずれにも参加していない」は減少しています。活動内容では、「町会・自治会の活動」は70歳以上、「子ども会・PTAの活動」は40歳代で多くなっています。</li> <li>・「参加しなかった理由（問12-1）」について、年代別でみると、60歳代までは「仕事が忙しかったから」、70歳以上では「自分が参加したい活動や団体等が見つからなかったから」との回答が最も多くなっています。</li> </ul>
<p>今後の地域活動やボランティア活動に向けて</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「今後の参加意向（問12-2）」について、年代別でみると、20歳代では「時間に余裕が持てるようになったら参加してみたい」、30歳代以降では「興味を持てる活動があれば参加してみたい」との回答が多くなっています。</li> <li>・「参加に必要なこと（問14）」について、年代別でみると、20歳代では「活動に参加できる「ゆとり」や「時間」のある社会をつくる」との回答が5割で多く、30歳代から60歳代では、「参加する方法についての具体的な情報を広く紹介する」や「活動についての具体的な情報を広く紹介する」が5割を超えています。</li> </ul>

### 調査結果から見受けられる課題について

<p>地域活動やボランティア活動とその阻害要因</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域活動やボランティア活動に参加しない理由として、「仕事が忙しかったから」の次に注目すると、30歳代から50歳代で「どうやったら参加できるか方法がわからない」、40歳代から60歳代で「興味はあったが、参加するきっかけや誘いがなかったから」が上位にあげられており、参加の情報や周りからの誘いといった、活動の入口支援の重要性がうかがえます。</li> </ul>
<p>地域活動やボランティア活動の参加促進に向けて</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・参加に必要なこととして、30歳代以降では、参加方法や活動内容の具体的な情報の紹介があげられています。そして、60歳代からは「日頃から地域の人々との付き合いを深める」が上位3位に入ってきており、リタイア後の地域とのつながりの重要性がうかがえます。</li> </ul>

## 【主な図表】参加しなかった理由（問12-1）

### 【前回・前々回調査との比較】



### 【年代別にみた上位3位までの項目比較】

	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳以上
1位	仕事が忙しかった	仕事が忙しかった	仕事が忙しかった	仕事が忙しかった	仕事が忙しかった	参加したい活動や団体等がみつからなかった
2位	活動に興味がなかった	参加できる方法がわからなかった	参加できる方法がわからなかった	参加できる方法がわからなかった	活動に興味がなかった	きっかけや誘いがなかった
3位	参加できる方法がわからなかった	活動に興味がなかった	きっかけや誘いがなかった	きっかけや誘いがなかった	きっかけや誘いがなかった	参加できる方法がわからなかった
						活動に興味がなかった

## 【主な図表】今後の参加意向（問12-2）

### 【年代別】

	回答数	興味あるのば参加して活動	参加する時間に余裕が持たれてみたい	親しい人など誘いたい	親しい人など誘いたい	今後あまりは参加しない	今後まったくは思わない	その他	無回答
合計	583	48.0	29.2	17.2	21.3	5.1	3.4	3.8	
年代別	20歳代	36	41.7	47.2	25.0	16.7	8.3	-	-
	30歳代	83	56.6	27.7	27.7	16.9	6.0	1.2	3.6
	40歳代	92	51.1	32.6	18.5	16.3	6.5	-	1.1
	50歳代	78	50.0	50.0	19.2	16.7	2.6	6.4	1.3
	60歳代	139	48.2	27.3	11.5	24.5	2.9	4.3	3.6
	70歳以上	142	40.1	13.4	13.4	28.9	6.3	5.6	6.3

※網掛けは最大値（ただし回答数30件未満を除く）

## 【主な図表】より多くの人に参加するために必要なこと（問14）

### 【年代別にみた上位3位までの項目比較】

	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳以上
1位	「ゆとり」や「時間」のある社会づくり	参加方法についての具体的情報の紹介	参加方法についての具体的情報の紹介	活動の具体的情報の紹介	参加方法についての具体的情報の紹介	参加方法についての具体的情報の紹介
2位	参加方法についての具体的情報の紹介	活動の具体的情報の紹介	活動の具体的情報の紹介	参加方法についての具体的情報の紹介	活動の具体的情報の紹介	活動の具体的情報の紹介
3位	活動の具体的情報の紹介	「ゆとり」や「時間」のある社会づくり	「ゆとり」や「時間」のある社会づくり	「ゆとり」や「時間」のある社会づくり	人々との付き合いを深める	人々との付き合いを深める

## ■福祉のまちづくり

### 結果の概要

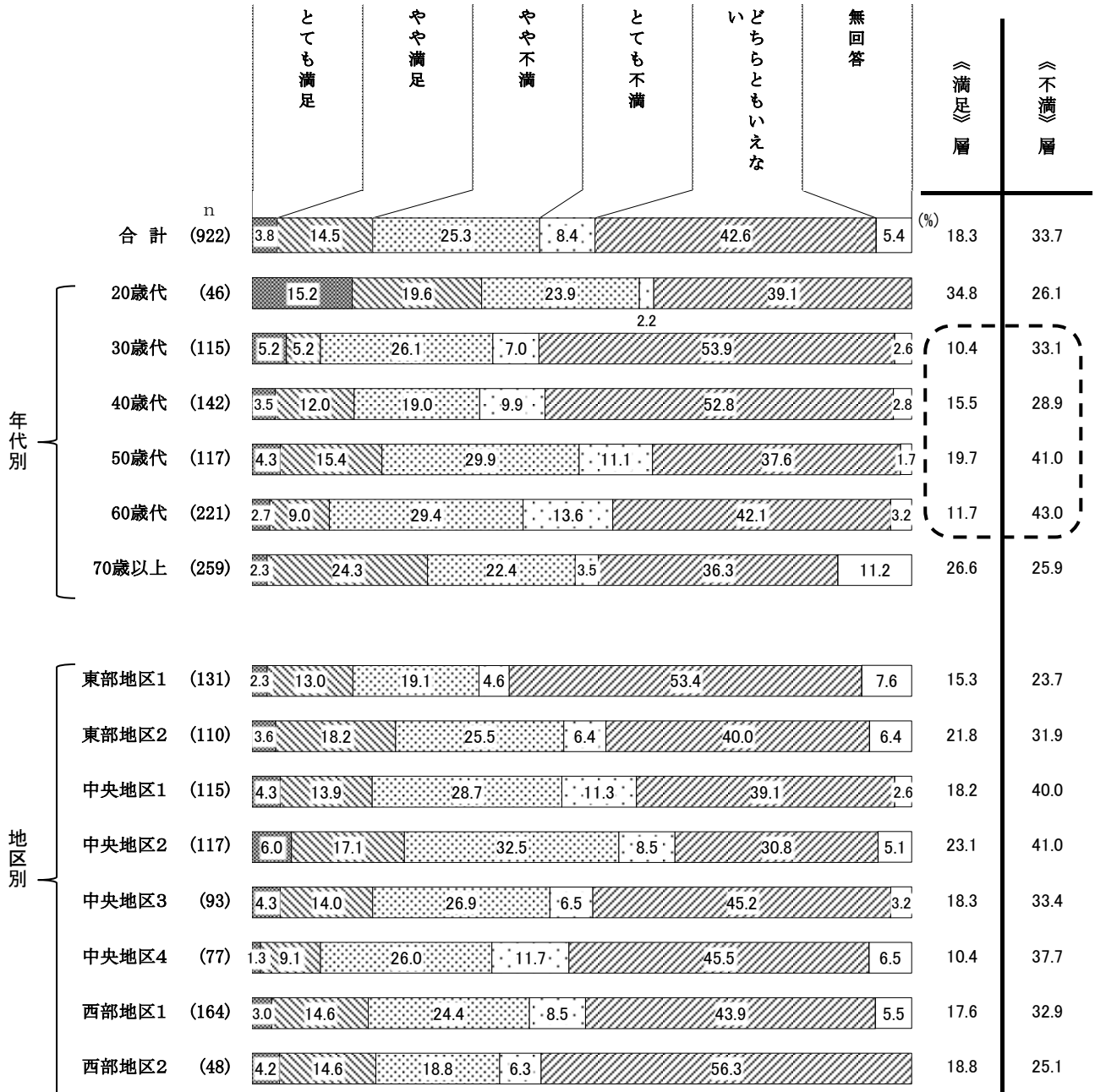
<b>社会参加の状況</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「外出頻度（問15）」について、約95%の方が「週1～2日以上」以上外出しています。</li> <li>・「外出時に不便に思うこと（問15-1）」としては、「駐車場・駐輪場が少ない」、「道路や建物の段差が多い」、「手すり・ベンチが少ない」と続いています。前回調査と比べて、「手すり・ベンチが少ない」、「階段の昇り降りが大変」との回答が増えています。</li> </ul>
<b>まちのバリアフリー</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「まちのバリアフリーの満足度（問16）」について、《不満》との回答が《満足》を上回っています。</li> <li>・「バリアフリーを進めてほしい施設（問17）」について、上位より「歩道」、「鉄道駅などの旅客施設」「電車・バスなどの公共交通機関」と続いています。経年比較でみると、前回調査と大きな差はみられません。</li> <li>・「外出先で困っているのを見かけた経験（問18）」について、「支え合いや助け合いの必要性」を必要であると感じている方のほうが、困っているのを見かけた経験割合が多くなっています。</li> <li>・「外出先で困っていたこと（問18-1）」について、前回調査に比べて、「歩いているすぐそばをスピードを出した自転車等がすれ違っていった」との回答が増えています。</li> <li>・「困っているのを見かけた時への対応（問18-2）」について、年代別では、30歳代の場合、「声をかけたかったが、どのように声をかければよいのかわからなかった」との回答が約3割、40歳代では「恥ずかしいので声をかけることができなかった」との回答が約1割となっています。</li> <li>・「心のバリアフリー普及に必要な仕組み（問19）」について、6割強の人が「学校教育において子どもたちが「心のバリアフリー」を学ぶ機会を充実する」と回答しています。</li> </ul>

### 調査結果から見受けられる課題について

<b>社会参加の促進に向けて</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高齢化が進む中、外出時に不便に思うこととして、手すり・ベンチ、階段の昇り降りといった回答が増えていることから、誰もが安心して街に出掛けられるよう、移動に関する思いやりのまちづくり推進の必要性がうかがえます。</li> </ul>
<b>まちのバリアフリー推進に向けて</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・まちのバリアフリーの満足度は、《不満》の割合のほうが多いことから、今後ともまちのバリアフリーの向上が望まれています。自転車等のすれ違いとの回答も増えていることから、安心して歩ける街づくり、自転車マナーの啓発等、歩行の安全確保の必要性がうかがえます。</li> <li>・困っている人を見かけた時の対応で、声かけの仕方がわからない、恥ずかしくて声かけができないといった回答が若年層に多いことから、障害への理解や声かけの仕方など、普段から学ぶ機会づくりの必要性がうかがえます。</li> </ul>

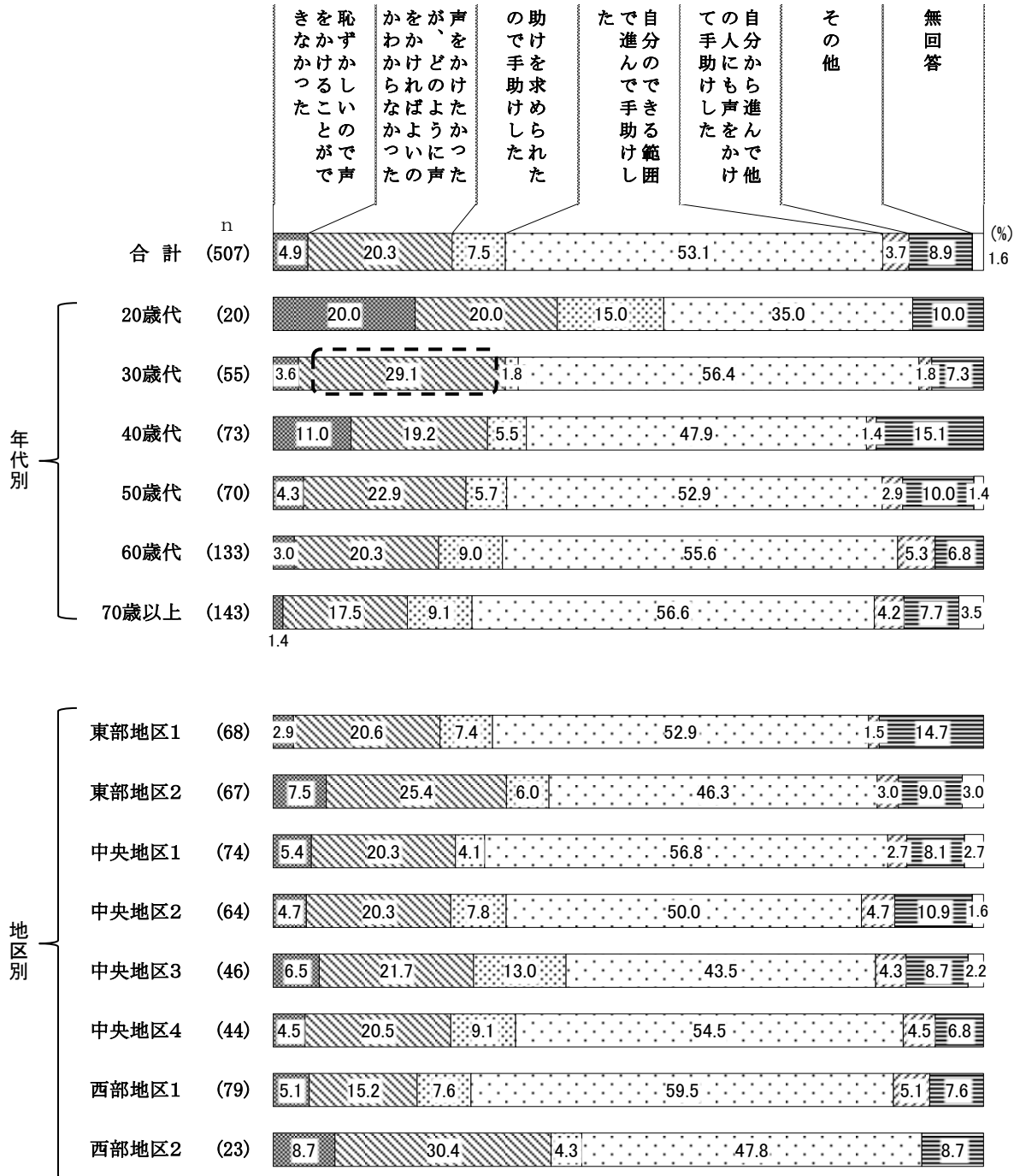
【主な図表】まちのバリアフリーの満足度（問16）

【年代別・地区別】



【主な図表】困っていたことを見かけた時の対応（問18-2）

【年代別・地区別】



## ■福祉・健康についての情報提供や相談

### 結果の概要

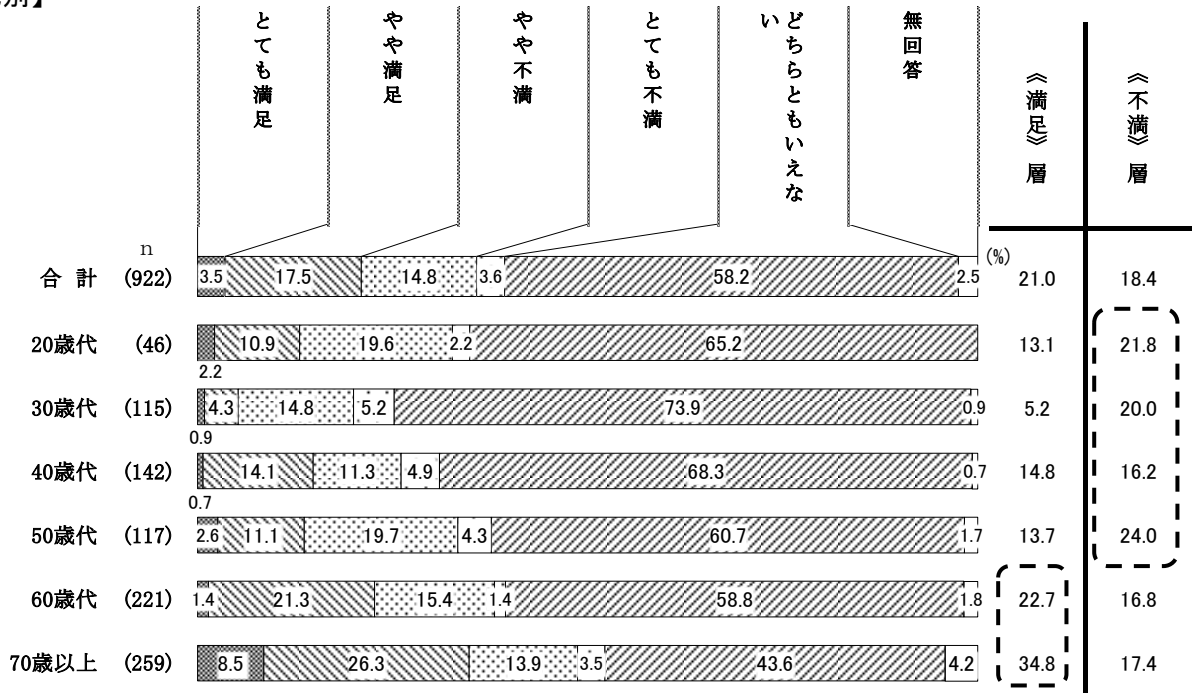
情報源の状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>「情報の入手先（問20）」について、年代別でみると、20～40歳代は「インターネット」との回答が最も多く、50歳代から「広報誌」が増え、60歳代以上では「テレビ・ラジオ」「広報誌」「一般の新聞・雑誌」が多くなっています。</li> </ul>
相談拠点等の満足度と周知状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>「区の相談窓口の満足度（問21）」について、約6割の人が「どちらともいえない」と回答しています。前々回調査に比べると、《満足》（「とても満足」「やや満足」の合計）との回答は増えて、《不満》との回答が減り、満足度はあがりました。年代別でみると、60歳代以上で、《満足》との回答が《不満》を上回ります。</li> <li>「区の相談窓口の周知度・相談経験・相談意向（問22）」について、周知度の高い相談窓口は上位から「池袋保健所・長崎健康相談所」、「区役所の福祉相談窓口」、「民生委員・児童委員」、「高齢者総合相談センター」、「社会福祉協議会」と続いています。困った時の相談意向は、前々回調査に比べて、すべての窓口で増えていきます。</li> </ul>
認知症の関心や相談先の状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>「認知症についての関心事（問23）」について、「認知症の予防に効果的な方法」、「認知症の兆候を早期に発見する方法」との回答がともに6割を超えて、多くなっています。</li> <li>「認知症の心配がある場合の相談先（問24）」について、上位より「家族」、「かかりつけ医」、「専門医」と続いています。</li> </ul>
地域の保健福祉の推進で力を入れてほしいこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>「地域の保健福祉の推進で力を入れてほしいこと（問25）」について、上位より「いつでも気軽に相談できる相談体制の充実」、「認知症高齢者に係る支援の充実」、「保健・福祉に関わる専門性の高い人材の育成と確保」と続いています。相談支援体制、認知症支援、専門的人材の要望が高くなっています。</li> </ul>

### 調査結果から見受けられる課題について

情報発信の手段	<ul style="list-style-type: none"> <li>情報の入手先は、年代によって異なることから、情報を伝えたい年代に合わせた情報媒体の組み合わせや工夫の必要性がうかがえます。</li> </ul>
身近な相談支援体制の充実	<ul style="list-style-type: none"> <li>各種相談窓口の相談意向は高まっており、また「地域の保健福祉の推進で力を入れてほしいこと」として「いつでも気軽に相談できる相談体制の充実」が最も多いことから、気軽に相談できる支援体制のさらなる強化の必要性がうかがえます。認知症の予防や早期発見の関心も高いことから、相談支援も含め、認知症ケアの支援体制づくりの必要性もうかがえます。</li> </ul>

【主な図表】情報の入手のしやすさや相談窓口に対する満足度（問21）

【年代別】



【主な図表】地域の保健福祉の推進で力をいれてほしいこと（問25）

【前回調査との比較】

